

郷土の歴史を探る

(四) 中世に於ける海外発展

会員 古藤 田 太

佐伯氏は地理的に云つて水軍を保有してはいたであらうが、佐伯氏水軍の活躍は、其の存在さへも、僅なる史料として、ついぞ拜見の機会に恵まれな。

中世大友氏の水軍は強大であつた。其の主力を構成したと思われ、ものに若林氏(北海部郡一尺座)、鶴原氏(北海部郡下ノ江附近)、二つノ流れありて本領地不明)、葉師寺氏(津久見市徳浦)、波部氏(東国東)、辻間氏(速見柳堂岡所辻間)があつた。

おが佐伯氏も大友氏水軍として軍勢力を構成し、又大友氏海賊衆として、或はその構成メンバーとして、大友氏政の担い手として活躍したであらう。佐伯氏水軍(民間船も含めて)の活躍を想起するよすがとして、この小稿を綴ることとした。

延元四年(一三三九)八月、後醍醐天皇は吉野山に崩じ、波瀾の生涯を閉じられた。京都の足利尊氏は心を痛め、又幕府は七日間の謹慎と行ない、百々日には盛大な仏事と営んだ。また夢窓国師の薦めによつて天皇の御冥福と祈る為、京都に天龍寺を建て、この寺の費用とまかなう為、明國に貿易船天龍寺船を派遣した。この天龍寺船派遣の前にも、即ち正和元年(一三二五)に尖上した鎌倉建長寺の造営料調達を目的として、鎮西奉行大友氏の貿易船と云う事で、建長寺船が派遣された事がある。

大友史料によると、南北朝合一の志永元年(一三九四)より文明の十八年間は勿論、明応、文龜と殆んど毎年の上りに大友氏の鋒々たる人物が朝鮮に差遣され、或は遣明

船として渡航してゐる。明応五年(一四七六)には足利義村(足利將軍義隆と云ひ更に義隆と改名)は「近く遣明船が歸朝するから其時大友、島津、大友の各氏に其の一艘宛に分与する」と告げてゐるが、当時貿易がいかに有利であつたかを知る事が出来る。權勢を誇る者は悉くこの貿易に關係したようだ。然して外國渡航を表明する史料は、文龜年後は少くなり大友親治以降大友氏の安泰期を迎えてから大友財政は、目覚ましい発展を遂げてゐる。このことは史料に表明されない私貿易や倭寇による武装貿易(民間貿易)に倣へものが多く、公貿易が減つて私貿易が増したと云う事であらう。

当時大友氏から足利將軍義隆、義晴に献上された豪華な品々の目録は数多く残されてゐるが、黄金、木刀、甲冑等は勿論、天文年間に入ると虎皮、豹皮、鹿蹄の名がしばしば見られる。天文九年(一五五〇)十一月、義隆の献上物中には珍品目砂糖さえあつた。同九年、大友義隆は築京修造料ならびに足利義教百年忌仏事料を献上してゐる。天文十年(一五五二)大友義隆が献上した長刀は、金具は黄金、半分は白金、半分は青貝であつたと大館日記に誌してある。大友氏の勢威は日に増して大きく、幕府に豊富なる金品の献納を続けることは、財政の富裕さを物語るものであつた。この富は、貿易から生まれたまへに外ならなかつた。

元來我が國の商品経済ならびに貨幣経済の発展は、わがて唐物や永樂銭等の貨幣の欲求となり、打続肉乱は武裝類の需要を高めて、西日本辺底の海賊行為を扇動したが、この空気が佐伯氏——民間人と含めて——に決して無縁でなかつたと想像する。正平五年(一三三〇)から高麗沿岸に対する倭寇侵襲は突如として激化して、高麗は衰微し、元中九年(一三九二)遂に滅亡した。又遼東半島、

浙江方面に倭寇は活動したが、中國に於いては正平二十二年（一三六七）朱元璋が「明」と建國して、多年中國を悩まし続けた倭寇の禁圧を日本に求める情勢にあった。南北朝争乱期中南朝側の西征府や、菊池氏の兵の強靱な武力の背景となした財政や軍需物資の供給者は倭寇であり、懷良親王に加担する松浦党であった。幕府の公貿易船（造明船）も天文十八年（一五四九）を最後とし、日明の国交は断絶していったが倭寇の跳梁は益々激しく、明國でいうところの嘉靖の大倭寇時代と現出するに至った。弘治元年（嘉靖三十四年一五五五）明國は鄭舜功を正使として、倭寇禁圧を求むるため豊後に派遣して来た。以下久多羅水先生の研究を要約して紹介しよう。

何故豊後が遣使地に選ばれたかについては不明であるが、当時大支義鎮の南蛮貿易が盛んになっていたものであり、舜功が府内に着いて義鎮に謁した時のことを万里長歌の一節に「策馬往いて豊後ノ若に見カ」とある。

鄭舜功が豊後を登って帰國するとき、義鎮は佐伯莊龍護寺の清授（別名一説あり）を正使とし、野津院到朝寺（現在野津所ノ国道十号線沿いに寺屋敷跡あり）の清超を副使として同行させた。

清授等は琉球を経て広東に到り舜功と離れて、潮州の海上に至つた時弓兵を蒙り、批文を毀滅されて遂に獄に下された。舜功は人と広東に遭り救われぬが、舜功も亦幽禁されて果さなかつた。清授は妄りに典例を引いて謬るところがあつたとして四川の茂州に流謫された。

当時揚宣は既に退き、胡宗憲が總督となり庇護の有力者と失つた舜功は「媚嫉に罹り身と縲綑の獄に墜か

る」と嘆じている。さきに四川茂州の治平寺に抑留された清授は、三年に及ぶも尚抑留かつづいた。感懐に左の作あり。

感懐

每憶扶桑額在哀 旅愁三載苦何為
 杜鵑無奈未啼路 啼落批頭雙淚垂
 遠來忠信本無私 上有天知人未知
 日月掛空輝万里 天主何不化東□

留別鄭回客

長橋楊柳館離情 每憶君恩淚暗傾
 一滴四川何日返 夢魂惟遠武林城

義鎮は次々と第三次の派遣をしたが、対明貿易に多大の期待をかけたいた事を想見する。庇を遣う者は山を見ず、で余りに性急であつたが為結句徒勞に帰したに止まらず、損失を招いたように見られることは遺憾の事と謂おねはならない。

(おわり)

書翰

佐伯と北川の關係

宮崎市

牛倉家貞 沢

武

人氏より

海集子に寄せられた私儀でありますが、短中にも多くの研究示唆が含まれていますので掲げて、会員の参考になれば